

## 在籍する大学とその歴史を知るための史料を活用すること

今井綾乃 / 滋賀大学大学院経済学研究科 博士後期課程

卒業論文の作成を控えた3年次に、わたしは在籍する滋賀大学経済学部の附属施設であった経済経営研究所（以下、研究所、と略記）を初めて訪ねた。自らの意思で向かったというよりも、当時の指導教員の導きによる。研究所へ行く前、卒業論文の主題に決めた江州系企業から史料の閲覧を断られ、見るに見かねた指導教員が、誰にも活用されていないというキャンパス内にあった旧彦根高等商業学校（以下、彦根高商、と略記）の帳簿群をみせてくれた。しかし、それらに記された数字の羅列に腰が引け、次に紹介を受けた資料が、複製された彦根高商の『学校一覧』であった。全てを閲覧したいなら行くようにと言われ、わたしは研究所へ向かったのである。

研究所を訪ねると、すでに全年度分の『学校一覧』が閲覧できるように準備されていた。それらには生徒の出身地、学科課程、生徒心得、教官の異動歴、進路動向といった多くの情報が記されていた。彦根高商の多様な様相がわかる『学校一覧』に夢中となり、閲覧のために研究所へ通うようになった。

卒業論文では、それらを活用して彦根高商の学科課程や教官の経歴を示したものの、資料そのものについて論じることはなかった。すでに彦根高商資料をめぐる議論がなされていたにもかかわらず、研究所になぜ『学校一覧』があり、ほかにどのような彦根高商資料が所蔵されているのかを気に留めていなかったのである。

博士後期課程に進学して初めて、資料そのものにも意識を向けるようになった。その契機のひとつが、RA（リサーチ・アシスタント）として従事した研究所での業務にある。それまでに研究所が行ってきた彦根高商資料の整理、保存、公開の作業を継ぎ、滋賀大学とその歴史に関わる資料の整理にあたった。対象資料は、研究所に所蔵されてきた彦根高商時の収集資料である『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』の地方版や生徒の手書き論文群、附属図書館に置かれていた図書カード、同窓会の陵水会に残されていた彦根高商から今日に至るまでの文書や逐次刊行物、滋賀大学経済学部の事務部で保持されてきた短大文書、などである。資料を手にとり、焼けや傷みにふれ、書き込みの跡をみると、それらがだれに

よって、なぜ作成されたのか、今日までどのように残されてきたのかを考えずにはいられなくなった。

資料の作成背景や歴史を捉えるにあたり、滋賀大学に在籍していることは助けとなる。整理前の資料が学内のどのような歴史や性質をもつ機関に残され、どういう状態で置かれていたのかを自ら確認することができる。また、職員がそれらをどう認識してきたのかを把握することもできる。在籍しているからこそ得られる情報を手がかりのひとつとして、資料が生み出された経緯をたどり、滋賀大学とその歴史を明らかにできるのである。

資料をめぐる思案するようになったのは、現在の指導教員の教えによるところも大きい。阿部安成先生は、各旧高商系経済系学部において高商資料の残り具合が異なることを指摘し、高商を考えるうえで必要な要素のひとつとして、資料についての議論を挙げている（阿部「彦根高等商業学校収集資料の可能性について」『News letter』第15号、2003年12月、同「講演録 高商歴史：その史料と研究」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』第56号、2023年3月など）。高商を対象とする先行研究では、資料について示されることがほとんどない。それらとは異なり、資料そのものに着目することが、高商について研究するわたしの構えとなっている。

さらに、わたしは別の構えも自らに課している。それは、高商の教育や就職を特定の期間に限らずに検討することである。高商研究では、対象とする期間を限定して論じる傾向にある。しかし、『学校一覧』や逐次刊行物といった彦根高商資料をみわたすと、先行研究では明らかにされてこなかった学科課程の変遷を踏まえた特徴、生徒の卒業後の移動などを捉えることができる。様々な資料を結びあわせ、対象を限ることなく検討することが、わたしの研究における軸となっている。

ふたつの構えは、今日まで彦根高商資料が残されてきたことに加え、研究所が主体となってそれらを整理、保存、公開してきたからこそ成し得る。その作業の延長として、わたしの彦根高商研究も、研究所が重ねてきた歴史の一局面におくことができるだろう。今後も、彦根高商資料と向きあいながら、研究を続けていきたい。